



編集月旦 2015年1月号

★世界で十指にはいる海洋大国である日本。環太平洋P・Pのダイヤモンド・リングの一面である千葉県南九十九里で迎えた初日の出です。ことは水平線からとはいかず雲間からの初光となりました。

☆新世紀に入ってすでに15年目、毎年、ここで初日に祈って、増えつづける高齢者が生き生きと暮らせる「高齢社会」の形成を訴えてきました。その間、この国の「高齢化」は世界一の速さですすんで、「団塊の世代」を迎え入れて、高齢者人口（65歳以上）は4人にひとり、3200万人に達しています。

★にもかかわらず、「大義なき」師走総選挙（12月14日投票）では、「高齢社会」は公約にも議論にもなりません。結果、48%の得票（有権者の25%で2552万票）の自民党が291議席を得るという「したたかな大勝利」に。



☆安倍総理は、ことしの年頭所感でも、これまでの施政方針・所信表明演説のなかでも、「経済のデフレーション（萎縮）」を脱け出す成長力を、女性と若者の参加に求めています。高齢者は経済の好循環の当事者として期待されないまま無視されて、格差が広まり強まる世相のうらで、急速に高齢者への敬意は衰落（フェードアウト）しています。

★2040年までに896自治体が消滅という増田（寛也）レポートの衝撃もあって、安倍内閣は「地方創生」をめざして、「ひと、まち、しごと創生本部」を発足させました。「人口急減・超高齢化」というわが国が直面するテーマに対し、①若い世代の就労・結婚・子育てでの希望の実現、②「東京一極集中」の歯止め、③地域の特性に即した地域課題の解決という三つを提案しています。とくに農業の再生・創生を掲げています。

☆三つの視点のうち①の実行者として若い世代だけを取り上げて、若者の地方へのリターンを中心に行っていることに異和があります。首相にせよ、担当大臣にせよ、政治の側のリーダーの新世紀15年の決定的な欠落は、次第に若い人の支え手となってきている高齢者の存在と役割を理解していないことにあります。地域の課題解決のための「知識・技術・資産の三本の矢」を保持しているのは、「支え手の高齢者」です。地域の特性を知っている高齢者のみなさん（・地識人）に出勤を要請すべきときではないですか。

☆長い高齢期25年（65～90歳）を過ごす居場所や仲間づくり、モノづくりといった「ふるさと生活圏」の形成へ意欲をもつ高齢者のみなさんと、それを継承し新たにふるさとを創生する熱意をもつ若い人びとの両翼の働きがないと地域は飛び立てないのです。

☆全国の自治体をまわって「高齢者の地域参加」を呼びかけておられる堀田力さわか福祉財団会長は、お互いに温かく助け合う「共生・共助の文化」を提案しておられます。暮らしの場で仲間や後人に敬愛されながら「人生90年」を精いっぱい生きる。さまざまな地域活動に参加して、できるかぎりの支援をおこなう。それはいずれの日にか介護・医療で自分にもどってくる共助支援です。

★「統一地方選挙」では、世代交代を叫ぶ若い候補ばかりでなく、高齢議員への激励と推薦が必要です。特性を活かした地域づくりに経験が欠かせないからです。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の目標です。（編集人 記）

